

アラビア語（世界の女性語）

著者	西尾 哲夫
雑誌名	日本語学
巻	12
号	6
ページ	24-27
発行年	1993-05-20
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005860

アラビア語

西尾哲夫

1. はじめに

身近な観察から述べたい。昨年(1992年)の夏、私の所属する東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所は、アラビア語エジプト方言の言語研修(150時間)を行った。男女各1名のエジプト人にテキスト作成のインフォーマント及び授業のアシスタントとして協力してもらった。その過程で2人の個人語レベルでの音韻・形態・統語等の言語の形式面でのいくつかの相違に気付いたが、さらに言語自体に対する意識の差として、「言語の規範性」つまり自らのことばの規範をどこに求めるかという点において意識の差があることがわかった。エジプト人の男女2人はともにカイロ大学文学部日本語学科を卒業しており、フスハーと呼ばれる文語アラビア語の十分な運用力をもったインフォーマントである。アンミーヤと呼ばれる口語アラビア語(カイロ方言)の表現に関する、「よい用法」はどれかという質問に対して、男性のインフォーマントの方は、大抵フスハー的表現を基準にして判断材料を提供するのに対し、女性のインフォーマントの方はフスハー的というよりはむしろ、アラビア語の言語研究の分野で「教育を受けた(人の)口語アラビア語(Educated Spoken

Arabic=ESA)」と呼ばれる言語変種を基準として判断を行うことが、男性インフォーマントの場合より比較的多かった。以下、このような両者の「威信の言語形式(prestige feature)」に対する意識差が、アラビア語世界の言語使用における男女差の要素を構成するものなのかどうかについて、アラビア語の社会言語学的研究の議論と知見を照会しながら考察してみたい。

2. 二言語変種併用(diglossia) 社会の女性語

アラビア語社会を最も特徴づけるものは、“diglossia”(二言語変種併用)である。二言語変種併用とは、同一言語社会の中で同一言語の2つの変種が使われ、それぞれの用いられる場面が、社会的にはっきりしており、それが安定している言語使用状況を指す。通常、2つの変種は社会的威信の高いもの(フスハー)と低いもの(アンミーヤ)から構成される。アラビア語社会の場合、フスハーは、モスクでの説教、大学の講義、ニュース放送、新聞等の公的場面で使用され、一方アンミーヤは、家族・友人との会話、ソープオペラ、民衆文学等の公的性格のあまりない場面で使用される。しかし、実際の言語使用においては、必ずしも両者

が明確に区別できるわけではなく、話し手のフスハーの習得度つまり教育度などの要因によって、両者の中間変種の連続体が社会言語学的に観察される。フスハーの特徴としては、正式な教育により習得されること、文法が複雑で学問的語彙が豊富であること、文語であること等が挙げられ、アンミーヤの特徴としては、母語として習得されること、日常的事物の語彙が豊富であること、口語であること等が挙げられる。

アラブ世界のこのような言語状況に着目したFerguson (1959)の研究以来、アラビア語の社会言語学的研究のほとんどが、二言語変種併用に関連する問題に集中してきたと言っても過言ではない。言語使用の男女差に関する研究も例外ではない。例えば、イラクのバスラ方言を研究したBakir (1986)によれば、受動表現と補文標識の2つの変項に関して男女間に使用分布の差があり、少なくともフスハー／アンミーヤという対立の図式の中では、男性の方がより威信度の高いフスハー的表現を多用する。同様の事実は音韻面での男女差について他にも報告されており、一般的に言って、女性の方が男性に比べて標準文語的性格を持つ威信のある言語変種としてのフスハー的表現をあまり使用していない。

このようなアラビア語社会での威信の言語表現に対する男女間の差異は、ヨーロッパ諸国における言語使用の男女差に関する研究から得られた知見と相反するものである。例えば、Trudgill (1983)は、「年齢、教育、社会階層などの他の表現を考慮に入れたうえで、平均して女性の方が男性に比べて、より標準語に近

く、威信度のより高い言語形式を使う」と述べている。また言語変化に関連して、Labov (1982)は、「ヨーロッパ、カナダ、合衆国、ラテン・アメリカでの研究から得られた一般の原理は、安定したあるいは社会的に認められた変異に関与する反応において女性の方がより保守的である。しかし、この一般的知見は多くの中東や南アジアの社会では逆になる」と述べており、このことに対する彼の説明によれば、女性の言語上の保守性の問題は当該地域の文化的・歴史的背景によって左右され、「公的生活で女性が大きな役割を伝統的に果たしていないところでは、支配的〔男性の〕文化に属する言語規範にあまり強く反応しないのが文化的に当然のこと」であり、中東や南アジアにみられる女性の言語規範に対する非保守性は、当該社会における女性の地位に起因するものである。

Labovに代表される考え方は、アラビア語社会における威信の高い言語変種をフスハーとみなし、それに対する近接度によって、言語的保守性に関する男女差を導き出した知見に基づいたものであるが、それに異を唱えたのが、Ibrahim (1986)である。彼によれば、二言語変種併用の社会とそうでない社会では、威信の高い標準語と低い通俗語の関係自体が違っており、特にアラビア語社会においては、「かくあるべし」という「文語的規範」としてのフスハーのほか、カイロ等の都市部の教育を受けた上流階級が使っている変種(Urban Standard Arabic)という威信の高い言語変種があり、後者の言語変種に対するアラブ社会の女性の対応は、ヨーロッパ社会などで

得られた知見と何ら矛盾するものではないとしている。

Walters (1991) は、チュニジアの北東部の町コルバ (Korba) でのフィールド調査に基づいて同様の観察を行っているが、さらに年齢と教育の程度によって女性 (および男性) が敏感に反応する威信の高い言語規範が様でないことを指摘している。チュニジアも典型的な二言語変種併用社会であり、さらにフランス語とアラビア語の二言語社会でもある。まず、変項 /ε:/ の語末における 3 つの変異型 [ε:] [I:] [i:] に関する彼の調査によれば、[ε:] がチュニジア方言で最も標準的かつ威信の高い変異形であり、都市部の知識階級及び上流階級の人々によって使われる。他の 2 つの変異形は地方部に観察される形で、コルバの住民によれば、老人、教育を受けていない人、女性によってよく使われ、特に若い人々の意見では、コルバ方言を周辺の方言から区別する特徴であるが、コルバの外で使うと物笑いの種になってしまうような発音である。このような社会的意味を持つ /ε:/ の変異形の出現頻度に関する調査結果によれば、一般的に言って、同世代であれば女性より男性の方が [ε:] をよく使い、同性であれば、若い人の方が老人よりも [ε:] をよく使う。言い換えれば、若い人あるいは男性は威信の高い変異形を好み、年配の人あるいは女性はそうでない「悪い (stigmatized)」変異形を好むということになる。さらに、彼のデータによれば、男性に比べて女性の方が教育の程度による因子に左右される度合が大きく、若くて教育水準の高い女性ほど威信の高い [ε:] の変異形を使う。つ

まり、女性の話し手にとっては、[ε:] の変異形を使うことが自らの教育程度の高さを示す 1 つの言語的指標になっているのである。

しかしながら、Walters の調査したもう 1 つの変更 /s/ は興味深いことにかかなり異なった女性のことばの姿を見せてくれる。彼によれば、変更 /s/ には [s] (喉頭化音) と [z] の 2 つの変異形があり、前者の方が標準的に威信の高い変異形とされる。ただし、/ε:/ の場合と異なり、性・年齢等による社会集団と 2 つの変異形の連関を示す意識は人々にはない。彼のデータによれば、まず女性の場合は年配の (したがって教育を受けていない) 女性が [s] を使い、若い女性は教育の程度によって異なり、若くて教育を受けていない女性が年配の女性とほとんど同じであるのに対して、若い教育を受けた女性は [z] の方を使う。次に男性の場合は、年齢に関係なく [s] と [z] の両方を使うが、[s] の方を好む傾向が強い。また、男性で [z] の方をよく使うのは年配の教育を受けていない人である。つまり、社会的に威信の高いとされる [s] ではなく、[z] の方を教育を受けていない年配の男性と高い教育を受けた若い女性の両方が使うという結果が出たのである。これをどう解釈すればいいであろうか。Walters の見解によれば、/s/ の変異形である [s] と [z] は (少なくとも男女の性差や教育の程度という因子によって) 十分に社会的意味を付与されたものではなく、若い (教育のある) 男性が [s] を選択しつつある一方で、若い教育のある女性は、教養のない女性が使う [s] ではなく、古い形の [z] を使う

ことで、新たな社会的意味をその言語使用に吹き込もうとしているのである。つまり、若い教育を受けた女性は、年配の同性とも同世代の異性（男性）とも異なる方向の選択を行おうとしているのである。

ここで最初の質問に戻ろう。コルバの町の事例の場合、男性と女性のどちらが言語に関して保守的なのだろうか。変項/ ϵ :/と/ ζ /のデータは性差だけでなく、少なくとも年齢差と教育程度の差も考慮しなければならないことを示している。つまり、/ ϵ :/の場合のように社会的にその威信の高さが認知されて安定した変項の場合には、女性は特に年齢が若くなり、教育の程度が高くなるほど男性におとらず保守的で威信の高い変異形を選択する。しかし一方では、/ ζ /の場合のように、フスハー的規範を背景とした威信を持つ変異形ではなく、別の変異形を選択する傾向が、若くて教育程度の高い女性ほど強くなり、場合によっては、[z]の選択に見られるように男性以上に変化が急進的である。

3. おわりに

ことばの男女差が社会的アイデンティティーの一指標として機能している社会は、不特定多数の男女が社会的に出会う機会が多い、女性の社会的進出が進んだ社会である。その意味で一部の都市部を除くアラビア語社会はまだその途上にある。ただし、アラビア語社会の女性達が教育を受け、社会進出を果たすにつれて自分達のアイデンティティーをことばの上で示すために規範とみなす威信の高い言語変種は、コーランの言語である古典

アラビア語そしてその現代版としてのフスハーという男性支配社会の規範語ではなく、都市部の上流知識階級が自らの集団的アイデンティティーのために生成しつつある言語変種なのである。アラビア語社会が女性にとって欧米なみの社会になったとき、はたしてフスハーは生き残っているのだろうか。

参考文献

- Bakir, M. (1986) "Sex differences in the approximation to Standard Arabic: A case study", *Anthropological Linguistics* 28-1, pp. 1-10.
- Ferguson, C. (1959) "Diglossia", *Word* 15, pp.325-40.
- Ibrahim, M. (1986) "Standard and Prestige Language: A problem in Arabic sociolinguistics", *Anthropological Linguistics* 28-1, pp. 115-26.
- Labov, W. (1982) "Building on empirical foundations", W. P. Lehmann & Y. Malkiel eds. *Perspectives on Historical Linguistics*. Amsterdam. pp. 17-92.
- Trudgill, P. (1983) *On Dialect*. New York.
- Walters, K. (1991) "Women, men and linguistic variation in the Arab world", B. Comrie & M. Eid eds. *Perspectives on Arabic Linguistics III*. Amsterdam. pp.199-229.